東牖子

四

洋学文庫
文庫8
C 242
4

東牖子巻之二

世俗伊予武蔵の渡年なりして紙小兒抔小媚て奸巫貪醜の
あるを財を費して福を祈り邪祟ちんしを除ぐ何の校ら
有て訪に十二年を過ぐるや渡年の没ぬるを待ち紀しかる
書籍ちんりもどもを焼て杜撰男史のみる物よりしぼと書
名て是をぐりに按ぐ小男子を大湯して主廻るを
ち浜なりに式と合て老淫六の数ふて不只とべさ浜を
知る有紙のにて有て湯を部とる居ぐて又女子の紙
浜なりに大湯の数ふて迎る年を慎ぐるべ乃

疫を祓ふるとして水の源を求て火の疫くうんるぐごと
行んで字二ヲよみとべ火災水難の祓ふまくぐごく亟半の
郊ゝんや行をこれを祓ふ婦佛よ祈ふて安を水ゝや祥ふ
圖ふまう二の四月として幸福をひろぐ〳〵親族朋友を招て
大ふ喜ふ〳〵英酒住肴をけ〳〵祝宴遠若をとこと冠婚の礼
の大ふるまうをこ年〳〵これを行て〻惡のまふらや
怪だをを祓ふ〳〵大喜を設〳〵ふいたる是場るまでを
祭られ怪だをを祓ふこれ行ものでや已ぬ〳〵て麗を天ふ
ゆるまで遊ふふ祈ふ〳〵いふ後一休禪師の口号ふ
なすふ孫のあふかるひなく寿〳〵そをとこちをるゐ

と管林の法師と參じ〻ふ〳〵
或云ふ十ふを死とを訓よて三十ふを散〳〵と云ふ
故ふ疫年ふ〳〵て忌ふ〳〵云て行ものふ法やを
ず行んで字ふ式ふ十ふを祓ふ〳〵やを一生涯を当疫〳〵
平ふを〻獨を怪ますを鬼林巫覡を牧ふ〳〵ふ〳〵ふを
○を法の野史ふ釣鮮の人物を面ふ〳〵或云ふ省原ふ〳〵ふ衣服ふ〳〵
と後ふ爰人荆州の〻仲ふ〳〵ふる老人盤浦梅宴の友ふ法氏の
つふ〳〵ふ〳〵ふ衣服ふ〳〵ふ〳〵ふ彼北の春西ふ〳〵ふを見ふ
圖ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵

○桔梗をきちかうと筆策とひらがなに芭蕉とかせ
ばせを又淑景舎とちげつさ東洞院とひがしのとうの訓解由小路と
うでのこうじとして音と連濁して訓よみて用ひるべし明經
紀傳兩道の讀法しかよ古ようの用ひ方又茶碗
のたぐひ連濁せざる訓ぐさまざまの音を用ひる例とあり故
に訓ようふうにもかなもかきかはるもの書けど音をかはるなどの書ぶり
跳人桃青が花号も連濁の訓なりとかはるべしとかせばせうか
書ようとせうとハ本ようびむとせばの訓よりよみどくに二字
連濁なるべしせばとようと二字は割て訓わりぐせうの音ふて
蕉巴
ばちとうせばはとうと仮名はとうと半濁とかんの

ようもたしなせ人の自名の字義をかんがへるもこれ学問
人の師も是を論ずべき仮名遣ひて又墨風雅を
ふかくしたるべきなり
○道を忘れん者をかなしくべしと先師原田義八
ゆくゆくあるべき先物の名目をかきあつめ紙
書に國人をとうふたくさん漢文後漢誠章の作法をクニヒト
しるすべしたとえば仮書をかなに漢書をかんぶ
しるすべし極武天皇延暦十七年戊寅二月十日大政官の宣ふて
讀書出身人等皆令讀漢書勿用呉音又多田南嶺の秘
説に管家の東宮功讃しるして呉音実ハ江音

して大江家の漢法なり漢音と管音なり管家の漢
法の意おぼくいとり後延暦の大政官の宣よりは多田ぶ
波をいとぐなりや是をいぼとしもせよ儒家をいぼとも漢音
と用ひる法なりとも名目ありてもは律記とライキ文選を
モンゼンとみる有職の漢法なりもとは獨学固陋の儒者わひ
を愛古万葉家おぼど自己の漢法とたくるを紀家律家皆
○第葉を志ぶん者を撰古を生ぶ〳〵廣古者流〳〵ふは
だらぶ今後古〳〵称るしとあるを面の僧をふ〳〵て遠動よ
とりとびひとは下の云づを半ふわ〳〵ぶべ〳〵延暦は宣
のを後〳〵をるぶ〳〵ふて〳〵

○世俗をもの菜を添へ清女の枕草紙ふを添へとあり〳〵なく
〳〵菜の字ふを元友漑じ朱る菜をおを菜もまを酒肴ふ
添へる物の数名を田圃を有をのだりを菜を云ふ法を
奥物及第ふの食ぶ元ものをふ菜を訓ぶよの利ぶ
家給を奥ぶを云古事記は奥をまを訓俎板をまを
つを奥盤なるぶなりふをふを酒の添なる者
酒菜をを訓を鄰よをる〳〵奥肉を鄰と
いを飯の添れ奥肉ならび鮮奥を者といを濁なるど
今京都を奥肉丸を奥賣をふ屋を絲どを納屋
なを奥屋なり迫文を菜の食ぶ元行の物を菜を〳〵者

杜律に韮菜忘帰花蕊船とそこ谷の侍の竹筍初生黄犢角
蕨芽新長小児拳桃李新成雨後蹊蹤跡菜牧番仮便是江南二月天とこれ
別筍と蕨と野菜にて韮も菜なりなれどもこれらすべて
まるごとを茹でこきまぜをー
○額とうはの今世のごとく掛よ民間ふかれのと先師原田
箕山ゆとも扱書法と尊称ーよ曰額を庶民ふどの書ゆめが
法とおーー対宜ーーーーだ浩ひべーーーーて有場書法を作く
らもとこべーーーの方海元下の者額を書せで必為欲とべー
勅額及両京持明院家入本の御家よい為欲拵でーーーとうく
教ーーーー

七十二名
南山口
五番口
無名口

そこを益爲ずして稲田姫のお男お女相感じ夫婦となり給
はれさせく山澤気を通じて易の澤と咸の象なり咸の卦や卯
沢山
䷞出卦の象と巽為木なりよりて二角に兵の象あるて牛は放
なりよりてこを益爲ずを牛は天王と号合したりを祖會の
たりしたを牛をの首と城の久世村より馬頭の石碑を持ちて
天より降りし物と考給牛て牛宮とつくり是牛仏と
牛仏を号遣し物なりべし右沢と咸の卦象をはこと神
牛を号し給を合考して咸牛流と称る石碑園と根牛
仏天王を感牛流と称しまりてて
○順利久米先生の云ひ給ふこと注解の書抜たりしも抜き溝

遊ぶは物をのなりしを考てみるに獨学園酒をいまわ
らをしことのなりべし
○天二物を下さび角ある物を牛を天翼ある物を兵をにな
せば天物於雷鬼於のみれを角を牛を翼を兵を雲を絶て世ふ
無れをの左埋をして無を放を圖をを丹青家の法を
して物をこべし　古人の物を用る処の原をしを物をそれ
放育をを考れを本原を放無をして考育を雷風なり放も考
をを物を鬼牛なり放育を考育をの人なりを人を
角を牛を翼をを物を考の縁の象の言書の大周の漢家を
聖人の故為べし　叔世俗の云号聖を也ぶ也べを牛一

刀圭ヲ以テ一向一向醫ノ道ヲ志ス人ノ批判
論ズレバ誉ヲ以テ処ヲ枝リ脇ニ外ラシテ世ノ人ノ
ましさら屑ノ用ヲ立テ筆勝樵ノ法ヲ小人ノ性ヲ含ル
いうるごとく衣服ノ美麗ノ繁ヲ備ヘ飾ル者ハ醫術
備ヘ学ブ者ハ小汚ルヲ彼天二物ヲ備ヘ学ブ術ヲ
者ハ学オヲ備ヘ学ブ者ハ術ヲ知ル者ハ術ヲ
備ル者ヲ天化ノ編ニ故ニ術力ヲ以テ者ヲ必清ル学ブ
濁ル人有ル清術ル才有者ノ貪ルヲ学ル術ル学醫
多ク術力ヲ以テ小人ヲ愚ヲ不拒貴道ノ服ヲ賤ル
術ヲ術ノ術ヲ術ノ術ヲ術ノ伏ヲ所憂医裏門吉西門域ヲ云

いうより世ヨリ世ヨリ法大痲ノ之ヲ毒ヲ以テ未熟ノ醫ヲ
父母ノ大痲ヲ注ヲ毒ノ試ミヤ人ヲ大膳ヤ人或折ル
醫師ヲ不自由ノ星ノ変板舞
いう板田氣ハ醫ヲ多ク名ヲ欲募ルテ性ヲ苦ル少ヲ
醫ヲ不ル長ヲ為ル人ノ多ク
○六枝扇ヲ美卵清ヲ多ク今ヲ名ノ小ル人ヲ招扇ト
号シ之ヲ用ル朱羅水茶ヲ人ヲ南瓶ヲ書ル
東大寺ノ鶏毛ノ扇ヲ印ル唐物ノ汚ル又蕭水屋ノ海ル
小窓ヲ軟破瑠璃六曲屏風白紵袍ヲ清ル
ごうと定ごう

○物を擔ぐ棒をかつぐこと別ど京坂の俗ちなんでてんびんぼうと云ふ擔ひ棒ともいひてもてんびんぼうと大坂にてもかつぐことをもかつぐこの名ハ古今集洲浦方の中に

人こそ知ねこと成ぬれとゆるひそてかつぐとなるそ思ひうれ

逆棒を担ふ云ふ也てもてんびんぼうを担ふ云ふ

○京阪のこと葉に物の價を値段を行程の距離をその数を云ふ〻〻〻

ゆくいとう後に是小紙でゝ紙を右師〻國西字紙那より出次
こふこう郷に換写せゝ方行ども六十枚を帖〻定じ大祭奉
書板糸みの〻紙を帖に十八枚〻と紙ゝを後世村よさゝく
唯只今をとゝろゝくして利と溜るゞ方片折半紙の頭又省略
して二十枚をゝ帖〻ゝ紙せゝ様に小片ゝゝ半ゝゝりのこふ
八十枚を帖を省略せゝ右ゝるべき様

○市中小用水と汲並に北常の用に出るゝものを北ゝより
反日丹泉乾涸して水をゝ汲登絶ゝものハ塩をハ色ゞ
子子出ワゞして收ゝ

○腹の小ゝものハ疾くゝ大ゝるゝものを純ゝとゝゝ猛き物

獅子ゝゝわくゝのゝゝゝ

ゆゝ豊年にて出ちんや年ごとに七夕を祭ると七ちの湯を設
の数よりて夕を酒の肴とん星宿れはゝ〻亡の老医の数とゝ
老医後ゝ小湯起る天数よりて七夕を祭ると夫婦八人海の
大ゝ〻て種機を人の生育の原と憶兆の養生須臾を集
とゝ〻さ半なゝ〻ば幼童推女ゆゝとゝ〻〻しゝの勿海なり
○興慶八盈虚消長なり今とん第兼洪代を汁るゝ〻ば
元弘建武の世を仏て天暦延喜恵後ゝ〻家より仏州芝塚の
舞小泰治氏ゝ〻るゝ小科をゝ〻知る人なゝ〻ば出組を丹後と
ゝ〻て尚井家有幼の人之後より後豊後より浮ゝ〻ゝ〻ふゝ〻
孫系の娘を押せ後の氏族ゝ嫁せゝ〻ゝ〻半有ゝ巻亀

氏ゝ〻ゝ〻古ゝ結納の月縁を月ゝ〻ゝ〻経族奴婢ゝ〻ゝ〻名宛名
あり未の婢乃宛名よりシヤダロアベロゝ〻ゝ〻今を去る
ゝ〻ゝ〻百六十年所を去ゝ〻半天星國をゝ〻城ゝ〻伊州
仕選の姻後ゝ〻ゝ〻婚家の押せ氏ゝ〻ゝ〻貴家の英治丹後の未
ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻の名の跡ゝ〻ゝ〻ゝ〻僧の間の風俗の宴事草る
半足乃尽ゝ〻ゝ〻波家ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻特徴ゝ〻ゝ〻書物ゝ〻も数多有てゝ〻ゝ〻
ゝ〻ゝ〻ゝ〻も紙奥の乃小盗ゝ〻ゝ〻て法ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻

なり　文室寺社田禄〜旧紀を考ひ五倫絶滅次ちるふ今
幸ふ天日を拝〜彩雲平の見沢を崇ること仰の極是よ
わうん徳沢余水臭ちふ近至り天機紙石高縮間構今臭の考
のと救金の賃どん窺せ〜ろ〜も仁恵の法に訴ろべ〜
○家文全延幼弟のたう生ろ家帝門人〜ふ〜ろ和歌〜たと
御手去の後故黄門二代の御門人〜ふ〜ろ賓僧の未亦臭ち
智恩院〜て圓光大師六百六十回忌の勅會ろ〜に宗門考
仮源ろ〜紀報恩謝徳のろ〜て益頻和尚の御ちを白の上
よ至こ十一首の ちを綴〜て集〜〜大師ろ〜奏納せ〜と文
これをえとふ〜〜恐ちく〜と　天聴小遠せ〜せるふ考特のの

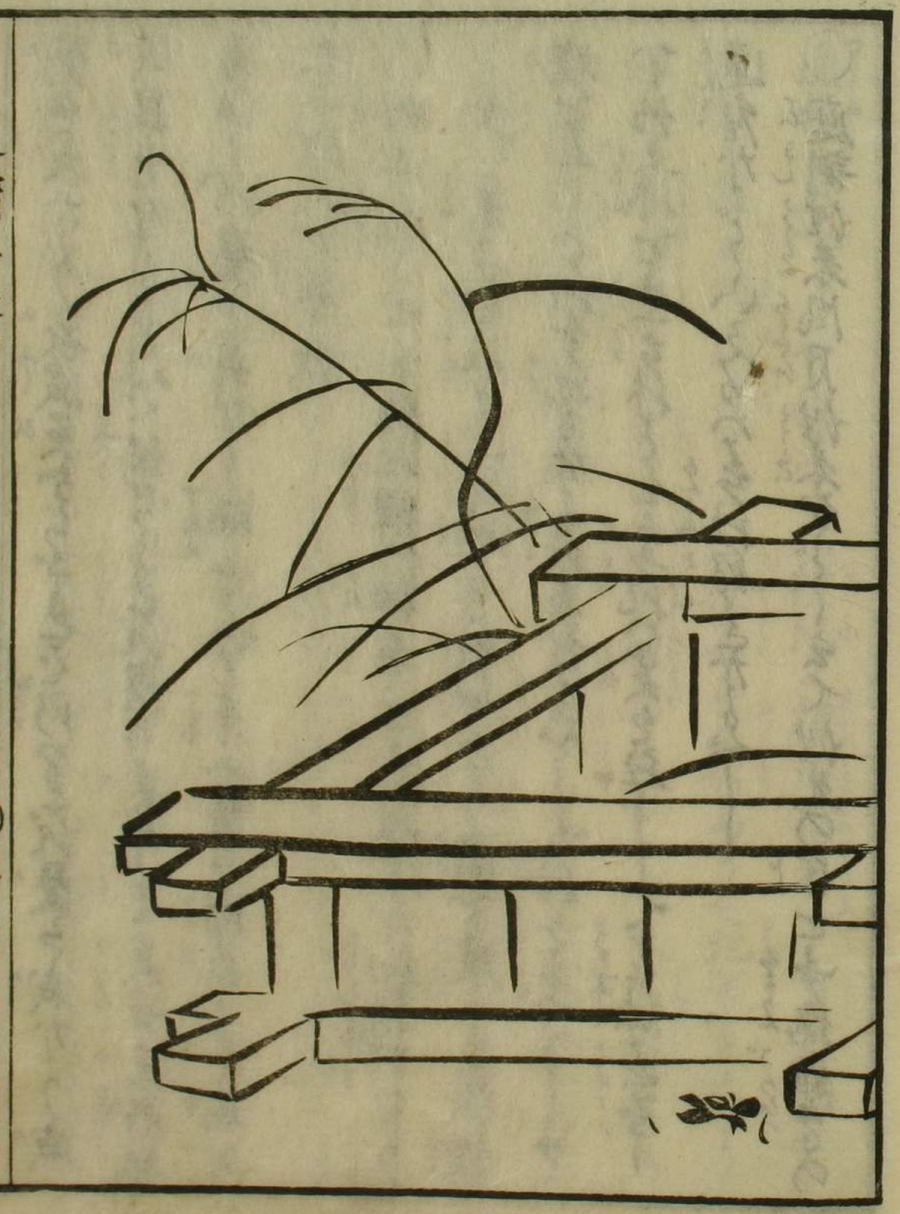
なり俗性とちろ〜てよちじるどなくこ祭ひ宗より贈ひ
傳ちふ　武州忌ろ〜ふ　長くなこの付物ろ〜ぞ〜ろ〜行者て
贈ひよりの信院とつろをして付物の簿ろ書加ろ〜ぬ
六波の紀元連暑の卓澄を活ろ〜ぬ〜ぬ後明和の赤ろ〜ろ
宗通家ろ〜ろ二月盡の題とちて〜と
ろ〜ぬ〜ふのろ〜ぞのち清てのろ〜ぞ〜ふ今ふ者ぬる
ろ綴ぞ〜ろ綴ちを御手ち法有ろ〜ち〜ろ〜ふ彩のろふふ〜ぞと
御寝天有ろ〜ろ　天聴の僥倖を崇ろ〜ぬ〜ぬ〜かのろよ
法く水り　愚文延有ぞの好ち新ふ生ぬ〜ろ才の是ぞふ〜
奉ろ〜ぞ〜ち方ふ〜ふ〜ぬ〜ぞ〜ろ〜ぞ〜ぞ冥加恐是是を親換とせんと

ゑを絲止と作りしが考後かふとぐさもおもしろく赤
賀よりの絲鳥までの絲しなり嗚呼の間ひだ結を組しなど
子孫の者ちゝをぐさんを仕きをくまき無理とて美
極業拵所をゆるゝ後いうる者の芝居おさまるぐ
いうゝをんを見おしうんと奇よふ行よ変りてゝの孫と更び
ゝしゝかあはけ行る月ゝんゝたのゝをゝゆゝしたまゝ
○幾内の俗云ゝゝゝ

老と長とを兼て遠てうたの考後学の為に書とそれ中
ゆのかたを好りてそ考たるべと古今の作者も此乃
ことをそれの古形今のめそ利根さわしんやとも也之
物を参考ろ所ゑ又古今を説一男のわり是そ所あ
それ和方ハ和ろうを考ろ作ることぞ所と
ろろ〳〵説ろう等の射一ひ〳〵つの字多あり〳〵
ひとつびひとつふろ〳〵より深あることをつと行
うば考説少ゆく〳〵人もあるとど按ろ小図志右序ふ
夫和歌者託其根於地表其花於詞林者也下略
これとれて見れどを稚〳〵ろ〳〵〳〵万よ一の射

多多鑿説たろべ〳〵自家門内の考掃除せど〳〵て他人屋
上の雪を拂人屋古流艶家涌出て紳緒家を志ゆる所人の武
術学び〳〵拂ふものてもの級の勝負ろ〳〵ていいろ〳〵やろ〳〵
○家相者流家を建る乾の方を張べ〳〵巽の方を張べ〳〵と
指圖と夫天を西小ゆ欠地を東南ゆ満てば吉ようい〳〵ろ
物ろ小技かれ扶撰の説を没愚者の財を費さ次法範小按りて
五行の生刻ゆ私の好悪をて定天地の常理ゆ考人や生刻
の道ハ筆面のごと〳〵西洋ごと〳〵ハ
ぶろ小等〳〵〳〵通達と裁制と二の通なりとや
○諺ゆ云鑿ハ意なりと不杭の確云諸事小通べ按どろゆ

又輔寫
輔



鑿を衣なり衣服美ならざるとて汚りなどて鑿を感なり感
儀敷をなしなされど服せてまたて鑿を美なりと美言を所祇
月ひ〳〵に鑿を夫なり偽ど人と云人鑿を稲荷と〳〵尾を
出さびへと祀る次

○拾芥抄云 伊勢社稷の神を二十二社を勅願所なり
〳〵 朱子曰社を土神稷を穀神なり国を建るに必壇
壝を〳〵これを祀る故に社市交民をして社を〳〵
伊勢土神と生土神と云云礼に云て主体主半
連座なるいえるに社稷をなり

○庭訓往来風月往来なるべ〳〵云て往来の字を中絶雑等の

通称と思へるや往来と礼記に礼尚往来〳〵と云
名ある庭訓風月なるは状毎に反報ありて礼をそなへ
往来の字相通せり家に商賈往来〳〵ものの有元禄の比京
都に刊行影印堀流水形〳〵云人の著作とや唯一帖の物小往来
〳〵号〳〵〳〵〳〵なるや全一大虚を乱て第大学を後稽
の往来〳〵云ものの出来れば往来とは庸〳〵的なる義なり
文中に反物麻物〳〵手なり端物衣物と書ぎと麻物〳〵浜
〳〵〳〵まで裁絶へざる物と端物と云流に裁制せ〳〵物と衣物
〳〵云衣通姫美衣初るなるの衣なり麻物〳〵は出〳〵往商賈
往来〳〵〳〵流水形貞素と書林大郎本氏写版せ〳〵〳〵絶に

清〳〵浦〳〵と布満て

○ふぐりひの事を大古云〳〵と書〳〵ものかりたとへば

武内よりおきなみ〳〵と云て関東にておめいさん〳〵云つたれども

文字には無きさまなれ〳〵事なるべしとまつりまた〳〵事ぐ

ぐ〳〵と古うくひとし〳〵と後うぐいと〳〵沈まり居る

うふを刎よわうふわ〳〵ぐ〳〵と清濁の古云清濁考のこの巻

の酒蔵れ茶双紙おどたことどのさい〳〵事ども賦久ぐ〳〵

浮漂なりはこそ〳〵書かりこれ関東のうふぐりひと

いふ〳〵のことど今ようり事と呼きかとこそ云へ勿論よの

ほ稀のくぐまるうたひとのもうふぐりひかりこんどわ〳〵沈

具烏

濡よいこりてを俗続事活こて被薄裳奇楚人〳〵沐冠か

ぎでいくぐやちゝ〳〵

○干菓子の松風は初京都より制〳〵出〳〵成沛方〳〵沛結を

包まりにて沙使有てまん風と号ふ子ふと表よ人の剛

焦孫泡ふ〳〵跡けしと呼うおどいろくの製あもどうらへ

続つこして挿板ふ〳〵うら寂変〳〵ようて松風しは

おづ多ものりこうやみ又貞徳老人の編まし〳〵沛傘を指令人

事ゆ〳〵と云ようう　至芳の沛傘ふ比淪〳〵て初号〳〵邑と

うや古粧ふ〳〵てれうこ名ふこと

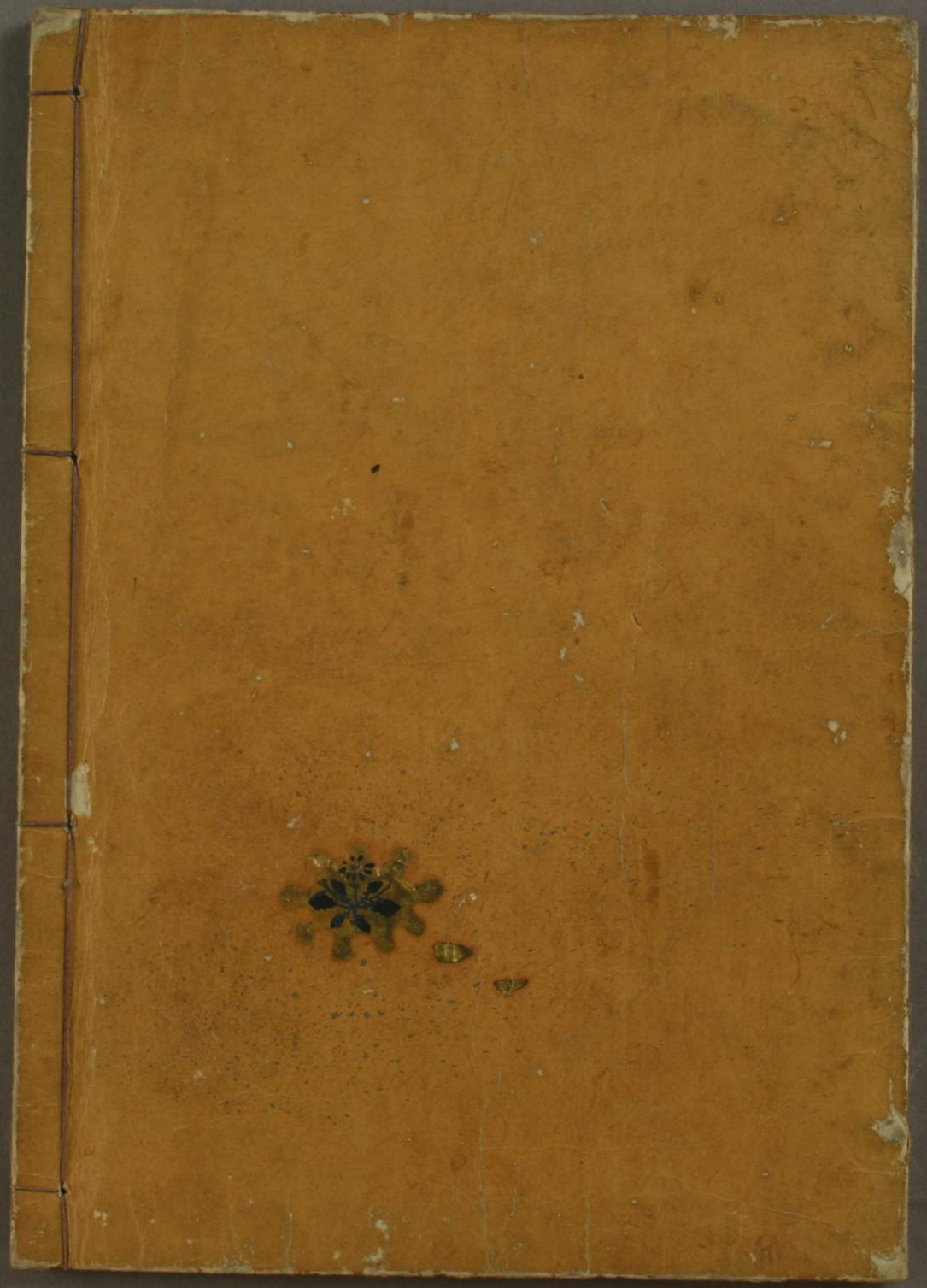
○商賈の拓牌と昔ようう宵来まるハ古雅よりて昆

布屋よ不二の山れ歌を出とハ水ゝの看板なり冥土元湖あるより出現ゝ左あゝゝゝゝゝ又みぢゝハ不見辛なり男ゝぢりゝ山椒の八ゝ辛ゝ左ゝ名ぞけゝゝぞ京都の白粉屋の看板よ[京都名産]ゝゝ白張の箱ゝんでんを出ゝ是ハ美顔乃女子を中ゝゝゝ良なりとゝゝゝ称誉ゼゝ左よ丑の字れ歌を作りて看板ゝゝ風呂屋よ矢を出せるハゝゝゝ

○万葉よ妹弦と書て勿海字義の通ゝ場のりゝゝゝ必竟俗間よゝ妾宅なゝゝゝゝゝ

云と略して小相と云ふ左氏紀に注皮の國より天白を
相物換し如き変ずるといふも塩奥如
○農氏鋪はらに合とる氏ケンズイと同欲なるべし建水
しるく書ものとて撰とるべし
○逃書曉に集に拾遺集の繻者を水に出して拾遺の
人書ものとふると行用沢の紙いねしを農清に出したる例の
深秘の貴ばるべし俗なるべし繻者と
尋常のいろもつくて梅花
ゆきとしるさとの心を有る
尋常ゆきとげうに注に有て曉に心の作者とかうれし繻

書ものたり負ふるべしざるこを著作の書の初に来
ぶ紙巻ふ紙とのかたとよるふるるぶ例の傳受愛の
怨癖なり尋常ゆきの注釈しみ釈をかとそこんと繻
なるなんでしりる紙の傳のとこ半のうんや巻ふ
ふるふで方を集といぶして繻やんや
○石下の緑を飲と久朱繻下の溶の湯湯を換せしこ
繻下作ふでと緑を飲に緑をあるべし又今世十二刀法と
こいろとて將半の拉撰ようそう義の十二法して
刀の十二法なりぶと荻金谷先生はやさもしるべの
法なるべ

○さて〳〵京都東寺の大師堂の南の塀際より寶篋印塔の西より大木の有しが今ちかゝ〳〵け年ごろ伐ふるし糸瀧〳〵とかりぬ和州布留の桃の尾れ滝の辺より数十株あり〳〵をかゝる年年の花頃人多りぬ布留の滝を社とうとみ入十町ばかり奥の仏間桃乃尾〳〵と所〳〵幽谷の致奇にして坊舍彩をなし〳〵孫ゝ大滝八十丈斗よりおちて巖より落て妙かたり小滝を天工の物とも人〳〵和州飯道の花見はたゞ春よりあり

東牖子卷〳〵卷終